



BIC、書き手、読み手

席に戻ると、全員が深刻な顔をしていた。

すぐに気づいたのは、その場でただひとりの女性が居ずまいを正していたことだ。美しい眺めに面した窓という窓を、彼女は閉ざしていた。まるで修道女のように。もっとも、着ているものは、まったく別の道に身を捧げていることを物語っていたが。

その手直しは、話し合いの助けになった。

私の注意は、まっすぐ男たちへ移った。

彼らは明らかに案じていた。ドアに書かれた役職名についてくる権威を失うのが怖いのだ。それだけで、彼らの力量について多くのことがわかった。

彼らは従業員だった。

いまではもう、ほとんど誰もそれを覚えていない。

オーナーではなかったのだ。

私は短い前置きと、ひとつの単純な観察から始めた。

男であれ女であれ、掃除道具を持って部屋に入ってくると、誰もがすぐに、その箒が新品かどうか気づく。新しい箒は、違う音を立てるからだ。

彼らは私をじっと見つめた。

学校で習ったフランス語が役に立った。もっとも、長年ほかの言語を話してきたせいで、ときどき発音が引きずられたが。

私は微笑んだ。

それから説明した。Bingは私の投稿をひとつの参照点に変え、Gillette関連の検索クエリの中に位置づけ、ウォール街のアナリストたちがそれを読んで微笑み、考えをめぐらせるようにした。一方Googleは、自分のウェブの生態系の中でほとんど影響力を持たない、ただそこにあるだけのものとして扱った。ロシアのYandexはといえば、事実上、関連性の外へ追い払ってしまった。

それでも、私はそこにいた。

生まれ故郷の町に立って。

BIC Franceの取締役会をまるごと、自宅の玄関先に迎えて。

かたわらにはChanel。この面会における唯一の、本物の付加価値でありつづけた人だ。

私は相変わらず、ただの物書きだった。

ナラティブの力を、かつてないほど理解していた。持つことのほうが、所有することよりも面白くなりつつあった。

そして人は、どの会社にとっても変わらず第一の資源だった。賢い解決策とは、決して誰かを家へ追い返すことではない。賢い解決策とは、アイデアによって物事を変えることだ。それこそ、女が男に対して、生まれた瞬間からやっていることである。

立ち去る前に、仕事鞆を開けた。別れを告げる支度をしながら、封をした包みをテーブルに置いた。中身はペンが10本。私がいなくなるまで開けないでほしい、と頼んだ。

Chanelがこちらを向いた。「どちらへ行かれるんですか」

私は微笑んだ。「物語をひとつ書いて、人々の世界を変えに行きます。やり方がようやくわかりましたから。ただひとつ違うのは、私が書くものを通じて差し出す提案のほう、いつだって上だということです」

私が去ったあと、彼らは包みを開けた。中のペンには、1本残らずひとつの名前が刷られていた。BICGILLETTENARRATIVE。

それは、ごく単純な面会の最中に生まれた。そして、多くの単純なものがそうであるように、忘れられないものになった。

フェルディナンド